

[集めよ!ジュニア会員!!]

⑧ジュニア会員体験記

基
般

太田智美 | 慶應義塾大学大学院

畑田裕二 | 東京大学大学院 学際情報学府

集めよ!ジュニア会員!!!

2016 年度から本格的に始まった本会のジュニア会員制度. 会誌編集委員会ではこのたび, かつてジュニア会員を経験し, 現在は学生会員・正会員となった人に対してインタビューを行いました.

ジュニア会員時代を振り返って

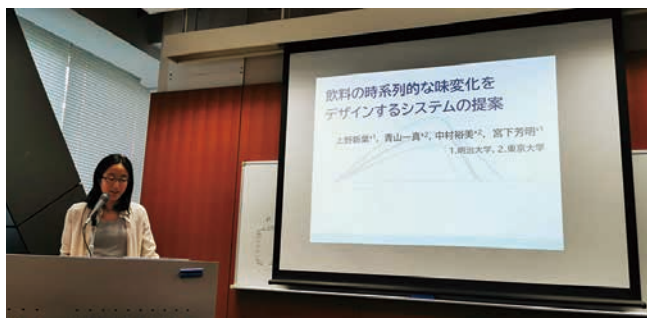
明治大学大学院の上野新葉さん(先端数理科学研究科先端メディアサイエンス専攻宮下研究室)(図-1)は, 2年生のときに現研究室に配属されたことがきっかけでジュニア会員になりました. 明治大学先端メディアサイエンス学科では学部1年生から研究室配属があり, ジュニア会員制度が始まったのがちょうどそのころだったそうです. ジュニア会員は学部3年生までの制度だったため, 4年に進級したタイミングで学生会員になりました. 同じころ, 元々興味があり発表などもしていたHCI(ヒューマンコンピュータインタラクション)研究会への登録も行いました.

上野さんの研究分野は, 電気味覚. 電気刺激を舌や喉に与えることで, 味覚の提示や抑制, 増強などを行うといった研究です. その中で, 上野さんは「後

味を強く, 長くする手法」の研究を行っています(図-2).

普段特に読んでいるのは, 自身の研究分野でもあるインタラクション関連の記事やコラム. 会誌は論文よりも敷居が低く分かりやすいため, 違う分野に触れる機会としても活用しているとのこと. 特に, 連載漫画「IT 日和」は読みやすく, それまで着目していなかった分野を知るのに役立っているそう. 視覚的にも印象に残りやすいとのことでした. 今後読んでみたい企画は, 失敗した実験や不完全なシステム, 研究には結びつかなかった経験談や研究の裏話などを垣間見られるようなもの. 「幅広い内容をまずは知って, 論文などよりも敷居低く読めることが会誌の価値」と上野さんは言います.

現在, 日本電信電話(株) ソフトウェアイノベーションセンタに所属する白石裕輝さん(図-3)も, 会費が無料ということをきっかけに会員になった1人です. 当時, 岐阜工業高等専門学校 電気情報工学科に通っていた白石さんは, 卒業研究を学会で発表したり, 情報処理学会の電子図書館を利用したり, 研究会に所属して最新の情報を入手したりするために, 学生会員制度を活用していました.



■図-1 上野新葉さん(学会発表時の様子)



■図-2 電気刺激を用いた後味の増強・延長手法

白石さんは、高専本科3年生のときに、岐阜県と共同で防災情報システムに関する研究に取り組んでいました。そのとき白石さんが開発していたのは、個人のスマートフォンから災害情報を登録するためのアプリ。これまで専門家しか登録できなかった災害情報を、県民も登録できるようにすれば、情報を迅速に伝えることができるのではないかと考えたそうです。

1年間ほどこの研究^{☆1}に取り組む、その成果を学会で発表することになったとき、入会したのが情報処理学会だったそうです。当時はまだ、ジュニア会員制度がはじまっていなかったもので、学生会員として登録したと言います。

「学生会員は学会に無料で参加できますし、懇親会にも格安で参加できます。特に懇親会は、さまざまな人と知り合うことのできる貴重な場でした。大学で教員をされている方には『若いのによくがんばっているね』と声をかけていただき、知り合いの研究者を紹介していただきました。また、同世代の学生とお互いの研究について語り合うことができ、良い刺激になりました。懇親会では、美味しい食事提供されるので、学会参加のモチベーションにしていました」(白石さん)。

学生会員になり、DPS(マルチメディア通信と分散処理)研究会に登録したことで(学生会員は1つ

まで研究会の登録が無料)、興味があっても読めなかった最新の論文が読めるようになり、アイディアの幅や研究の視野が広がったそうです。

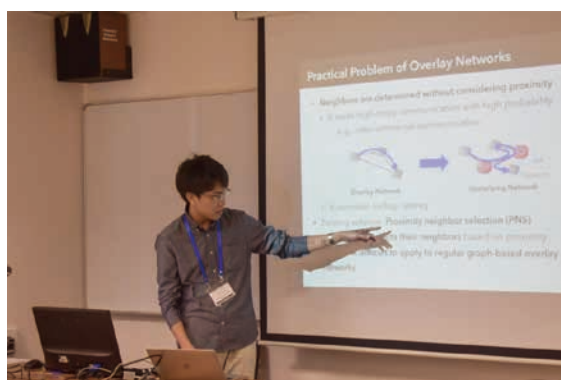
高専5年生になった白石さんは、共同研究を後輩に引き継ぎ、卒業研究に取り組む時期になりました。高専が契約していたCiNiiや、Web検索で読むことができる論文を眺めながら卒業研究のテーマを考えていくうちに、コンピュータ同士の協調の仕組みに興味を持つようになり、1つのコンピュータではできないようなことを複数のコンピュータで可能にすることに、面白さを感じたそうです。

「ちょうどこのころ、ジュニア会員制度がスタートしたので、学生会員からジュニア会員に切り替えました。ジュニア会員は、研究会に登録しないと読めない最新の論文誌まで、情報処理学会の電子図書館にあるすべての論文を無料で閲覧することができます。卒業研究では分散システムがテーマだったのですが、ジュニア会員制度は最新動向の調査に大変役立ちました。ちなみに、そのとき読んだ論文の著者にメールしたことがあったのですが、その方とは今でも研究会で議論させていただいています」(白石さん)(図-4)。

現在は正会員になり、会社ではオープンソースソフトウェア(OSS)の1つであるPostgreSQLの開発やデータベースに関する研究に取り組んでいるとのことです。データベース分野の中では、特にトランザクション処理とインデックス構造に興味があり、



■図-3 白石裕輝さん



■図-4 学生時代に参加した国際会議

☆1 <https://ci.nii.ac.jp/naid/110009904571>

電子図書館や研究会等を活用しながら調査を行っているそうです。毎月送られてくる会誌は、興味のある分野の特集が掲載されているときに読んでいるのですが、各分野の草の根的な研究活動の紹介やOSSコミュニティの取り組みをまとめた記事があればぜひ読んでみたいとのことでした。

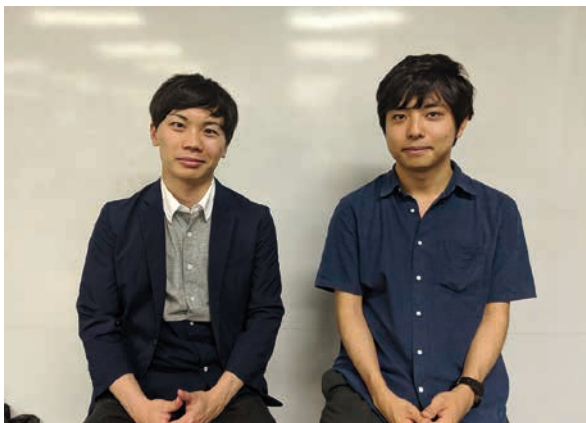
対面インタビュー

対面でのインタビューに答えてくれたのは、松井秀憲さん(図-5左)と大伏仙泰さん(図-5右)の2人。松井さんは静岡の高等学校から東京大学へ、大伏さんは石川県の高等専門学校(高専)専攻科を修了後、修士課程より東京大学に進学。記事執筆現在、2人とも東京大学大学院の修士2年生です。

始めに、2人がジュニア会員となった経緯とその後のジュニア会員制度の活用について聞いてみました。

松井: 大学2年次に専攻を決めたとき(東大では2年次の夏までは、全員が教養学部所属し、その後各々が専攻を選んで専門課程に進学する)、学科ガイダンスで配られた資料にジュニア会員の案内が入っていました。情報系に進学したということで、自分の分野の情報にアンテナを張ろうと思ってジュニア会員になりました。会費が無料だったのも大きかったです。

大伏: 自分は専攻科を合わせ8年間、高専に在学



■図-5 左: 松井秀憲さん, 右: 大伏仙泰さん

しました。ジュニア会員制度があることは高専の先生が教えてくれました。専攻科の修了研究(4年制大学の4年次に相当)を進めるにあたって、電子図書館を利用するためにジュニア会員になりました。

また会誌も無料で読めるとはいえ、オンラインでアクセスするまでにいくつか手順が必要だったので、読まずに終わってしまったことも多いそうです。会誌を読んでもらうために、紙の冊子を送るか、あるいは現代のジュニア世代に適した新しいメディアで発信した方がよいのかもしれない。

情報処理学会会誌で読みたい記事

2人は現在、情報系の大学院に進学し研究を進めています。自分の進路を振り返って、会誌で読めると嬉しい情報について聞きました(図-6)。

松井: 特に地方の学生には、自分の身近なところに情報分野で活躍する人のロールモデルがないことも多いです。首都圏に比べるとIT産業に触れる機会も少ないです。会誌で情報系のキャリアや、楽しそうに研究や仕事をしている「背中」を見られると、学生としては嬉しいです。また学生だけではなく親にも読んでもらい、情報分野の魅力や知識を子供と共有できると進路選択の際に正しい理解が得られてよいと思います。

大伏: 「先生、質問です!」は良い企画ですね。ジュニア会員だった当時の自分は質問をする勇気がなかったかもしれないけれど、ちゃんと質問をできる子はすごいと思うので、会誌側でも質問しやすい環境を作ってもらえると嬉しいです。また自分は実利に直結することだけでなく、たとえば「2進数とは何か?」のように、情報技術の根本のところを問うような記事も読んでみたいです。学校では時間や内容的に扱えない面白い情報が掲載されるとよいですね。

松井: 一方で、ジュニア会員といっても小学生と中高生、そして大学生では読みたい記事は違いますよね。多様なジュニアの要望に対して、「刺さる」

内容を、当人に届くように発信できるとよいですね。第一線で研究をしている優秀な人たちに話を聞けるのは情報処理学会の強みだと思います。最先端のワクワクする領域の話を、楽しく伝えてくれることを期待しています。

大伏：今はインターネットで電子部品も買えるし、使い方に関する情報もたくさんある。手を動かすことが簡単になっている。会誌にもそれを促すような記事があるとよいですね。ただ、開発に特化した記事ならほかにもっと詳しいのがたくさんあるだろうから、会誌では研究者が「コンセプト」と一緒に提示してあげると面白いかもしれません。たとえば、稲見昌彦先生（情報処理学会会誌編集長、東大教授）が自身の提唱している「自在化身体」という考え方に繋がる第一歩をプログラミングや電子工作と合わせて教えてくれるとか。

松井：最先端の人や技術に対して、現在の自分を

関連付けられたらモチベーションも上がりますね。僕も、会誌がジュニア会員の視野を広げられると良いと思います。専門が決まっていないうちに、学術・産業の垣根を超えてさまざまな技術や事例に触れる。会誌には読みやすさに配慮するなど、そのサポートを期待したいです。

ジュニア会員に一言

松井：ジュニア会員になっている時点で、アンテナの感度が高く、すでに大事な一步を踏み出せていると思います。そこからさらに、会誌などで読んだ話を、なるべく自分の身近な問題と結びつけ、興味を深掘りできるとよいかもしれません。

大伏：色んなことに興味を持ってみてください、かな。会誌は情報処理について広く扱ってくれているので、記事の中には今まで知りもしなかった、けれども面白いと感じる話があるかもしれません。全体をパラパラ見ることで視野が広がります。それは専門的な勉強を始める際にきっと役に立つと思います。

(2019年7月3日受付)



■図-6 インタビュー中の様子

太田智美 tomomi.pepper@gmail.com

国立音楽大学を卒業。現在、慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科 後期博士課程1年。「ヒトとロボットの共生」の研究に従事。

畑田裕二（正会員） yuno.lv3@gmail.com

東京大学工学部 電子情報工学科を卒業。現在、東京大学大学院 学際情報学府 廣瀬・葛岡・鳴海研究室 修士2年。バーチャルリアリティなどの研究に従事。